



台湾・思い出すままに

副理事長

ワールドステイクラブ 25 周年をお祝いし、ますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。

■その一 “バアサン”、“バアサン”

圓山ホテルの朱塗りの建物が見えると間もなく、日本アジア航空 201 便は、滑るように快晴の松山国際空港に着陸した。私が初めて台湾を訪れたのは、1976 年の初夏であった。当時松山国際空港は台北市内にあり、車で宿泊先のホテルまで 10 分とかからなかった。台北で仕事を終えると、国内便で高雄に飛んだ。

台湾最大の工業都市高雄は、高炉製鉄所の建設が急ピッチで進められていた。案内された建設現場は重機の鳴り響く音と大勢の作業員の熱気で包まれていた。高雄での仕事を終え、特急列車で台北に戻る。特急とは名ばかりで、高雄～台北間の 350 km を 6 時間半もかかった。昼過ぎに高雄と台北の間にある台中駅に到着。弁当を買おうと窓を開けると、駅弁売りが、“バアサン”、“バアサン”と叫んでやってきた。てっきりおばあさんと呼んでいるのかと思い、車内を見渡してみたが、おばあさんの姿は見あたらない。そうこうしているうちに、駅弁売りは行ってしまった。台湾語で、ちまきのことを“バアサン”と言うらしい。台湾はこの季節、どこの家庭でも自家製ちまきを食べるのが年中行事で、一家の主婦は腕の見せどころとばかり、自慢のちまきを作るそう。台中駅の駅弁売りが叫んでいた“バアサン”も、さぞかし自慢のちまきだったに違いない。

■その二 “正しく、強く、淑やかに”



台北の街は朝から小雨が降っていた。1999 年 3 月ワールドステイクラブ企画旅行で台北市内を観光している時のことである。われわれを乗せたバスは、台北市立第一女子高級中学校の校門前に停まった。旧名は、台北第一高等女学校で、昔も今も台湾女性憧れの女学校である。校門を行き来する生徒の緑色の制服姿がひととき目立っていた。旅行に参加した女性 M さんから、台湾旅行に参加した理由を、「亡くなった母親がこの卒業生で、母親の学んだ学校をぜひ見ておきたい」と聞いていた。ガイドが、守衛に事情を話すと入門を許され、校舎の

前まで行くと、雨に濡れて校訓碑が建っていた。古色蒼然とした石碑に日本語でくっきりと“正しく、強く、淑やかに”の文字が刻まれていた。M さんはしばらく碑の前を動かさずじまっていた。守衛の話では、一高女時代、生徒達は登校時校訓碑の前で一礼してから校舎に入っていたそうだ。短い時間ではあったが M さんにとっては忘れがたい思い出となったようだ。校門を振り返る彼女の目が心なしか潤んでいたことを覚えている。

■その三 真夜中の急病人



1 週間の台湾縦断の旅も終わりに近づき、最終宿泊地台北の圓山ホテルにチェックイン。いよいよ明日午後の便で帰国するばかりとなった。晚餐は北京ダックで有名な北京菜館でお疲れ様会。皆さん食欲旺盛で、健啖ぶりにいささか驚かされる。ホテルに戻りほっとして早めに就寝したが、午前 1 時頃ドアを叩く音で起こされる。ドアを開けると姉妹で参加した姉の方が立っており、妹の様子がおかしいので部屋にすぐ来てくれと言う。急いで部屋に行くと腹痛で苦しんでいる様子なので、すぐさま階下に降り当直マネージャーに医師往診を頼む。15 分位で医師と看護婦が到着、注射と投薬の処置をして、明朝まで様子を見ましようと言って帰った。私も部屋に戻り眠っていたら、6 時ごろドアを叩く音で再び起こされた。容態が悪化したのかと思い急いでドアを開けると、ベッドで苦しんでいた筈の妹さんが立っておりお陰様で良くなりましたと言われたので、お姉さんとは聞くと、姉は徹夜の看病疲れでまだ寝ている由、ほっと一安心。圓山ホテルは救急対応で、夜間の往診は複数病院と契約しているとのことだった。リーダーとして、高齢者の多い旅行の急病対策は、ホテルのみならず、いろいろな面においても万全を期したい。